

<今回>222回目 2017年11月6(月)15時~18時 601号室

読書は9冊目「邪馬壹国の証明」より

<前回>221回目(17-10-27) 出席者10名

資料 17-10-27-1)前回のまとめ(清水)

-2)「邪馬壹国の論理」読后感想文(清水)

-3)東国駅路網の再編(富川)

A 報告

「邪馬壹国の証明」の文庫本を大墨氏が購入してくれた(3冊)。安藤氏からも余分があったとして1冊寄付を頂いた。持っていない方、新しく参加される方用に取っておく(大墨氏には実費3冊・660円支払予定)。

懇親会8名 津多屋11781円(8・1500)+219円

B 資料 2)「邪馬壹国の論理」の読后感想文をまとめた。本の内容が難しかった。読み飛ばしたところが出たのは読書会で初めてであり、残念だった。高句麗好太王碑の酒匂大尉の上申書「碑文之由来」を直接証拠として発見して詳しく調査したことには日鮮の学者に影響を与えた。学会で古田説が認められた唯一の例である。(清水は紹熙本と紹興本を取り違えていた。紹熙本(宮内庁保持)に三國志初めの3巻がない。)

-3)富川さんから東山道から東海道に付け替えが行われた宝亀2年(771年)の武蔵の国の委譲問題はいろんな方が資料に使われている重要な文書である。東国5か国の駅名は図のごとく具体名がない。国道幅は12m内外、伝路(郡衙同士の交通網)は5,6m内外と理解した。各所の発掘調査で確認したい事項である。

C 読書 「邪馬壹国の証明」の「邪馬一国ののすすめ」から読みだした。

1)「邪馬一国」の表現は静嘉堂文庫の三國志(明代に復刻された北宋本)にある。誤解のない限り「一」を使いたい。

2)「はじめに」より。私(古田)は孤独の探究者ではない。各所の「読者の会」の支援があった。専門家の中でも水野祐氏は「九州王朝と倭の五王」日本古代史下、光文社刊で古田の方法は正しい研究の方法と述べられた。菅谷文則氏は「沖ノ島の三角縁神獣鏡をめぐる諸問題」、寺沢薫氏は「大和弥生社会の展開とその特質」で古田の方法論の正しさに言及している。

3)倭国紀行。筑紫は「チクシ」か「ツクシ」か 隋書倭国伝には「竹斯」とあるからチクシである。チクシは千の不思議なという現地の美称、ツクシは津(港)の立派なところという他称で、「都久紫」と書くだろう。対馬県郡東南端の神社に延喜式通りに「阿麻氏留」と神社の額がかかっている。「天照大神」の原始の状態である。

4)天の下。天上から地上に降りるということを疑うなど宣長は再三禁じている。人間に疑いを禁ずることほど愚かな行為はない。いかなる権威も疑うことを禁ずるといふ越権を犯したとき腐敗が始まる。

5)天降る地は中継地を介さない、筑紫と出雲と新羅である。壱岐対馬を中心とした海上領域では別名に「天」のついた島々が多い。天之狭手依比売(対馬)天比登都柱(壱岐)などの古地名に裏付けられている。

6)天降る(動詞)と天下(名詞)は一對のの使用例、九州以外の新植民地を指す用語である。新しい地に平和的に武力的に進出するとき「天降る」と呼び、新植民地が天下(あめのした)であった。

次回日程 17-11-20((月)15時から17時 602号室

12-4(月) 15時から18時 601会議室

12-25(月) 15時から18時 602号室